
珍アルバイトパレード

連

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

珍アルバイトパレード

【Nコード】

N4851T

【作者名】

連

【あらすじ】

世の中には変わったアルバイトがたくさんある。

そしてそれをやる変人もいる。

電話一本で、珍アルバイトの依頼。

やり手の老人、アサヒカワ氏が考えたろくでもないアルバイトとは？

大手人材派遣会社の元社長、アサヒカワ氏は退屈していた。現役を退いて一人で隠居暮らしをしているのだが、日々の生活に全くハリがない。そんなアサヒカワ氏はどうやったら毎日が楽しくなるかを考えていた。

そんなある日、病院に入院している友から電話がかかってきた。

彼は病気で首から下の上半身が麻痺しているため、院内にある公衆電話の受話器を奥さんに持ってもらって話している。

「やあ、元気か」

友は聞いてきた。

「それはこつちの台詞だ。どうかね、体調は」

すると友は苦笑交じりにこう言った。

「まあまあだ。しかし聞いてくれよ。ワシが本好きなのは知っているだろう。だがこの体では本が読めないんだよ。なので本をめぐってくれるアルバイトなんかいないかなと思ったたりしてね。いや冗談だが。妻も家のことで忙しいのでね」

それを聞いてアサヒカワ氏は、ピンとひらめくものがあつた。

「本……本めくりのアルバイトか。よし、うちの会社で募集をかけてみよう。時給千円にでもしておけば、すぐ見つかるだろう。まあ、楽しみに待ってる」

それから色々な世間話をしてアサヒカワ氏は電話を切った。

「ふむ。アルバイトか。そうだな。私も何か変わったアルバイトを募集してみよう」

それからアサヒカワ氏はしばらく考えた。アサヒカワ氏の家には使用人はいない。そんなものを雇ったら、

「羨ましいですなあ。うちにはそんな金はありませんよ」

というような予想範囲内の会話が交わされる。それが嫌なのだ。しかし、それに代わる者がいてもいいはずだ。それが先ほどの本め

くりのように、少し変わったアルバイトなら退屈もしないし話題性もある。そう思い、いくつかのアルバイトを思い浮かべてみた。

人脈の広いアサヒカワ氏には老若男女問わず、暇人がいっぱいいる。まず最初にアサヒカワ氏は体力のありそうなフジタという青年に電話をかけた。

「もしもし、フジタ君かい。元気かね。そうかい、けっこうけつこう。フジタ君、突然で申し訳ないが、君、うちでアルバイトをやってみないかね。なに？なんのアルバイトかって。いや、実はね、うちに来て時々、タンスやドアのところで足の小指をぶつけてほしいんだ。なに？そうそうもう一回言うよ。うちで足の小指をぶつけるアルバイトをしてみないかね。え、どうしてだって？それは私みたいな金持ちでも小指はぶつけるわけだよ。しかし、なぜぶつけるかというと、それは家にぶつける人がいないからなんだ。つまり、率先してぶつける人がいてくれたら、『ああ、私も気をつけよう』と思っ**て**ぶつけなくなるじゃないか。それをやってほしいんだ」

フジタ君は当然それを断った。

「一回につき、二千元出す。一日に一回だけぶつけてくれればいい」
金のないフジタ君はOKしてしまった。その日からフジタ君がアサヒカワ氏の家にやってきて、タンスなどに小指をぶつけにきた。アサヒカワ氏は面白がって笑った。日常がほんの少し楽しくなった。次にアサヒカワ氏は五十代のカナガワ女史に電話した。カナガワ女史は地獄耳で有名である。彼女はどんな悪口でも聞き逃さない。そんな彼女にやってほしいアルバイトはこんなものだった。

「ああ、カナガワ女史。今も君の悪口を言っていたところだよ。え、聞こえていたって？いやあ、さすがだなあ。ところであなたに頼みたい仕事がある。何かって？いや、実はどこの家でもそうだろうけど、うちの中で色んな音がするのだよ。そうそう、察がいいね。レンジ、洗濯機、冷蔵庫、携帯などの電子音だ。それを瞬時に聞き分けるアルバイトをやってくれないか。ピーピーピー同じような音で鳴るから、それがどの音なのかを探すのに一苦労なのだよ。」

頼む、給料は弾むから。おお、そうか、やってくれるか。毎日悪口を言っていたかいがあったよ。ははは、冗談冗談。では都合がよければ今日からでも来てくれたまえ」

そしてまたアサヒカワ氏の家にカナガワ女史がやってきた。彼女はいつも音に耳を澄まし、鳴ったそばからなにの音だ、と的確に示してくれる。アサヒカワ氏は、また話のタネが増えたと喜んだ。さらに続いて電話をしたのは現在無職の中年タハラ氏だ。タハラ氏は奥さんに稼いでもらっており、その奥さんからはタハラ氏の愚痴を電話でよく聞かされる。これはそんなタハラ氏にはピッタリの少し意地の悪いアルバイトだった。

「ああ、タハラ君。毎日ごろ寝しているのかね。なに？そろそろ仕事をしようと思っている？おお、とうとう離婚を迫られたのかね。ははは、そりゃあそうだろう。しかし君、普通の仕事なんか出来るのかね。出来ないだろう。そこで君にしてほしいアルバイトがある。うちのアルバイトなんだがね。実は一ヶ月前にうちのトイレの換気扇が壊れたんだ。しかし、私の当たり前嫌いは知っているだろう。トイレに換気扇つても普通じゃないか。そこで君、私がトイレから出てきたら、その匂いを吸って空気を入れ替える仕事をしてみないかね。そうだ、人間換気扇だ。え、嫌だつて？一回につき、五千円払う。なに、やってくれるか。そうかそうか、君にしか出来ないことだと思っていたよ」

そしてまたその日からタハラ氏がやってきた。タハラ氏はアサヒカワ氏がそのトイレから出てくるたびに、中へ入って目一杯その空気を吸わされた。アサヒカワ氏は悪趣味だとは思いつつも、くくくと笑った。一応タハラ氏の奥さんにこのことを伝えたが奥さんは、

「いい気味ですわ」

と今までの鬱憤を晴らすような晴れ晴れとした声でこころよく了解してくれた。

ここまで来てアサヒカワ氏はふと真面目に考えた。社長時代を経

験したアサヒカワ氏は人に媚びられることを幾度となく経験している。現役を引退してから多少それはなくなってきたが、それでも会社関係の人間からは未だに顔色を窺われている。

そこでアサヒカワ氏は勤めていた会社に電話をした。

「もしもし、私だ。アサヒカワだ。いや、急にすまないね。社長のマツダ君に代わってくれないかね。あ、もしもし、私だ。アサヒカワだ。マツダ君。この間、風の噂で聞いたんだが、私の現役時代、ずいぶんと私の命令に対して愚痴をこぼしていたようだね。え、そんなことないですって？ いやいや、確かな筋から聞いているんだよね、クビになるのかって？ 違う。違うよ、マツダ君。突然だが、君にちよつとした頼みがある。なに、たいしたことじゃない。どんな頼みかって？ それはこの私に向かって『アサヒカワのアホ、バカ、死ね！』と思う存分罵るアルバイトをやってほしいのだ。え、とんでもないって？ 給料は出す。頼む。私は部下のほんとの心が知りたなんだ。一時間怒鳴りまくって、時給三千円にしてやろう。え、嫌だって？ これは命令だ。今度カラオケ屋に行こう。そこで私への鬱憤を思いっきり晴らすのだ。今まで嫌だったんだろう。では君の知っているカラオケボックスで二人きりで会おう」

アサヒカワ氏は満足げに電話を切った。これで部下の本心が知れる。

後日、マツダ氏はアサヒカワ氏と無理やり会うはめになった。そしてクビを覚悟でその場に挑んだマツダ氏は、現役時代の不満をぶちまけさせられた。マツダ氏は泣いていた。そんな部下を見てアサヒカワ氏は心を打ち解けてくれた涙だと理解した。

マツダ氏はアサヒカワ氏から時給三千円を受け取った。なんのこともやら分からなかったマツダ氏は、ただただ悪魔の背中が去って行くのを呆然と見ているしかなかった。

そんなことをやっている内に、アサヒカワ氏の胸にふとあの憎たらしい気持ちが浮かんできた。それは月に一度の囲碁教室で出会う元同級生のオオサワ君のことだった。

オオサワ君は学生時代、アサヒカワ氏と同じ女性を好きになった。そしてその女性を取り合った末、オオサワ君が勝利した。そのことを毎回の囲碁教室で未だに自慢してくるのだ。オオサワ君は本当に性格が悪かった。性格の良すぎた彼女は、そんなオオサワ君の性格をも受け止めてしまえるほどの許容量の持ち主だったから彼と結婚したのだ。

そして毎度のごとく話を聞かされるたび、こんな老人であるにも関わらず、アサヒカワ氏は嫉妬の炎で胸の中が燃えるのであった。

アサヒカワ氏は知り合いの看板屋に電話をかけた。

「もしもし、サイトウ社長かね。ええ、元気でやっているよ。久々に仕事の依頼があるんだが、サイトウさん、『頭上注意』っていう看板を作ってくれないかね。え、それをどうするんだって？いや、私には宿敵の男がいるんだがね。それを男の頭に落としてやりたいのだよ。君、やってくれるかね。え、無理だって？いや、金は弾むよ。え、絶対嫌だって？どうして頼まれてくれないんだ！」

怒鳴った途端、電話は向こうからガチャンと切られてしまった。

アサヒカワ氏はぼそりと呟いた。

「叶わない事があるほうが人生面白い」

（後書き）

読んでいただいております。ありがとうございました。
変なことを考えるのが好きです。

やってみたいアルバイトはありましたか？（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4851t/>

珍アルバイトパレード

2011年5月22日22時40分発行